



# 妖怪の 創作



川崎ゆきお

「妖怪とは風流なものかもしれないなあ」と妖怪博士が語る。

「風流ですか」妖怪博士付きの編集者は、一応その話に乗る。妖怪の概略ばかりで、最近妖怪談がない。それがやや不満なようだ。

「江戸時代の妖怪絵を見ていると、川柳のようなもの、都々逸のようなものにも見える」

「色物のようなものですか」

「幽霊のような真剣さがない」

「はい」

「どちらかというと動物的だな。だから妖怪と呼ぶのだろうが」

「妖獣ですね」

「怪獣のように種類が多い。どれも似たようなものだがな」

「博士も一つ作ってみてください」

「そうだな、妖怪は作らないと出て来ん」

「しかし博士、作りものではやはり迫力がありませんねえ」

「今、作れと言ったのではないのか」

「言いましたが、やはり白々しい世界です」

「では、怖い妖怪ならいいのかな」

「怖いですが、退治出来るような」

「自分で作っておいて退治か」

「その妖怪には弱点があって……」

「ああ、それは少し違うなあ」

「飼い慣らされたような妖怪のためですか」

「そうそう。やはり野良でないと」

「野良」

「野生じゃよ」

「もっと動物的な。獣的なものですか」

「そうじゃな、そこに大自然などとも繋がる」

「じゃ、森の守り神のような妖怪とか」

「ん？」

「森を守っている妖精のような」

「あるなあ」

「あるでしょ」

「それは私の好みではない」

「あ、はい」

「家の守り神は」

「それはいい」

「じゃ、森はどうして駄目なのですか」

「山ならいい」

「森はどうして駄目なのですか」

「何を守っておるかじゃ」

「自然でしょ」

「それはリアルすぎる」

「自然破壊云々ですか。博士」

「そっちへ持っていくと風流ではない」

「はあ」

「風流は、どうでもいいことなんじゃ。そこにとどまっておるのがいい。家を守る、山を守るは妖怪ではなく、神だろう。やはり、何かいたずらをしてもらわんとな」

「妖怪博士にも妖怪の好みがあるんですね」

「まあな」

「風流な妖怪が好みでしたか」

「風流、風雅、これともまた違う。もっと子供っぽい」

「オバケが出たぞーって感じですね」

「まあ、個人の好みを言うべきではないがな」

「しかし、妖怪もおもちゃのようになっては迫力が」

「いかがわしさ、胡散臭さ、そういうのも必要じゃ」

「また、新しい妖怪を作ってくださいよ。博士」

「本物の妖怪が出ぬので、作る。これはやはり、やらん方がいいのじゃがなあ」

「はい」

了